

木畑洋一著

『二〇世紀の歴史』

(岩波新書 新赤版 1499)

岩波書店 二〇一四・九刊
B 40 三〇〇頁 八六〇円

本書は、一八七〇年代を始点とし一九九〇年代初頭を終点とする「長い二〇世紀」を対象範囲に、帝國的支配の隆盛と衰退の世界史を叙述したものである。一八七〇年代から第一次世界大戦にかけて「帝国世界」が形成・確立され(第一章)、それが二度の大戦及び世界恐慌の影響によって綻んでいき(第二・三章)、九〇年代初頭にかけて解体していく(第四章)過程が描かれている。日本のイギリス帝国史研究を牽引してきた著者が、最新の歴史学や国際関係論の成果を援用しつつ二〇世紀の歴史の様々な事象を帝國的支配との関連において意義つけていく様は圧巻である。

本書の屋台骨をなすのは、著者の「帝国主義」・「帝国意識」への強烈な批判意識である。客観的分析概念としては近年忌避されつつある「帝国主義」という言葉は、「帝国」による「世界分割の動き」という緩やかな定義のもとに意図的に固持される。そして、「帝国主義」を支えた支配者側の要素として重視されるのが、「帝国意識」(「支配」被支配の存在を当然とする心性)である。本書で繰り返し強調されるのは、いかに「帝国主義」のもとで支配者側が戦争や暴力を濫用したのか、という点であり、「帝国」が歴史上の

それぞれのモメントで引き起こしてきた蛮行が、新書に載せるには衝撃度が高い写真をも交えつつ、丹念に明るみに引きずり出されていく。同様に本書を通じて強調されるのは、「帝国世界」における支配者側の連携・被支配者側の分断という「非対称性」であり、また、そうした困難な状況を覆えそうと抵抗した被支配者たちの主体性である。

右記の歴史観の背景にあるのは、戦後史学、とりわけ江口朴郎の帝国主義論を引き継ごうとする著者の意志である。「長い二〇世紀」という新鮮な外殻の内側には、古き良き江口史学(そしてその上に育まれたものとしての木畑史学)の骨格がある。その意味で本書は、支配者と被支配者の相互的關係を描こうとするあまり帝国支配の負の側面を閑却しがちな近年の「帝国史研究」への抗議の書でもあるのだ。

しかし本書は、被支配者によりそって支配者側を批判するだけの代物では決してない。各章の終わりではアイルランド・南アフリカ・沖縄の三つの地域が、「定点観測」として論じられるが、これらの地域は、「帝国」において被支配者・支配者の二役を兼ねたという理由により戦略的に選択されている。つまり「定点観測」は、「帝国世界」における支配者と被支配者の二元論的弁別の可能性を明らかにしていくことで、本書に一貫性のみならず複層性をも与えているのである。「帝国主義」・「帝国意識」論が著者の情念の表れなら、「定点観測」は、脱植民地化後の諸独立国への冷靜な評価と並び、バランサーとしての理性の表れとみなせよう。

最後に評者なりのコメントを加えたい。そもそも著者の「帝国

意識」論はオリエンタリズム論と同様に第二次大戦後の世界の現状への批判意識と密接にむすびついて登場したものである。あまりに多くの要素を包含するこの概念について、本書ではその無意識性や多様性が強調されるに至り、さらにおそらく著者の本では初めてのことだが、現代ではほぼ克服されたものと評価されているため、本書における「帝国意識」の立ち位置は、核となりつてもどこか居心地が悪く感じられる。著者の先駆的業績により「帝国意識」の存在自体は自明視されるようになった今、支配する側の人々の経験に根差した、さらに細やかな議論もなされてしかるべきだろう。同様に、脱植民地化の駆動力と意義づけられている被支配者たちの動きについても、彼らの思想や実践をより経験的に描く余地はあったように思われる。また、著者は戦後史学の中で育まれた帝国主義像と近年の帝国史研究の接合を主張してきたが、本書においては前者の重要性の再確認に力点が置かれている感は否めない。

むろんこれらは本書の瑕疵というよりは、著者の研究を礎石としてなされていくだろう今後の歴史研究の課題である。いずれにせよ本書は、帝国支配の歴史の鳥瞰図として有用であるとともに、歴史学に半世紀近く携わってきた著者の研究や歴史観のエッセンスを味わえるものとなっており、多くの人々に実りある読書体験を与えるに違いない。

(長谷川祐平)